

本号では「佐渡金山世界遺産登録問題と朝鮮人戦時労働の実像」について特集を組んだ。本研究会のホープである長谷亮介研究員が力作論文と資料解題と日韓学術講演会・佐渡視察報告の3本を書いた。

特に長谷論文は、佐渡金山に関する2つの誤ったイメージ、落盤事故と珪肺がどのように形成されていったのかを一次資料に即して実証した優れた研究論文だ。「佐渡金山に関する先行研究が、真実を見る目を曇らせてしまう」として、佐渡金山の専門家で多数の関連著作がある磯部欣三が落盤事故と珪肺について書いたことが、誤ったイメージの根元にあることを明らかにした。これまで誰も指摘したことのない卓見だ。

歴認研は7月に、韓国からこの問題の権威である李宇衍博士を招聘して、東京と新潟で日韓学術講演会「佐渡金山と朝鮮人労働者」を開催した。李宇衍博士は経済史学者らしく様々な統計データを駆使して強制連行、強制労働説を論破し、「1939年から1945年に起きた朝鮮半島から日本への朝鮮人労働者の移動は短期的な海外移民だった。戦時労働動員の経験は戦後の韓国の産業化に役立つ側面があった。奴隷の歴史ではなく、栄光の歴史だ」と結論づけた。

私は同じ講演会で、戦時期に朝鮮から内地に240万人が渡航したが、そのうち戦時動員計画に基づく渡航は60万人、25%にすぎず、残りの180万人、75%は出稼ぎのための個別自発渡航だったから、日本の朝鮮人戦時動員政策は失敗だったと話した。同じ現象について、日本から見ると失敗した政策だが、韓国から見ると独立後の産業化に役立った短期移民で栄光の歴史となる。これが国際交流の醍醐味だ。

本号で鄭大均先生の「日韓併合期・日本人は何をを考えていたか」の連載が終了した。毎回、いろいろなことを教えていただいた貴重な連載だった。来春の単行本刊行が決

まったという、嬉しい連絡をいただいた。

一方、筒井先生が貴重な論文「戦後、日本人の国防意識の弱体化をもたらした歴史認識の変容について」を寄稿下さり、次号以降も連載下さることになった。第一回目の本号論文も憲法問題、国防意識を考えるにあたって、米国占領期に様々な勢力が新しい憲法を作るために動いていたのだが、その動きを理解する根底には、明治以降の日本の歴史をどのように見ていたのかという歴史認識問題があることがよく分かった。GHQが主導した占領期の「戦後改革」には日米の学界や政権中枢に入り込んだマルクス主義者が、日本社会の経済・軍事の弱体化をはかり「絶対平和主義の名のもとで徹底した軍事力の削減を行って、社会主義・共産主義への道を容易ならしめ」ようとしていたという指摘は鋭い。(西岡)

本年7月8日、安倍晋三元首相が卑劣なテロの凶弾に倒れ、殉職した。安倍氏は97年設立の「日本の前途と歴史教育を考える議員の会」(中川昭一会長)の発足当初から、事務局長として縦横無尽の活躍をされた。教科書問題や慰安婦問題などの歴史認識問題では、共に闘う同志だった。私たちにとってかけがえのない存在だった、安倍氏を喪った悲しみは深い。

歴史認識問題研究会として、心から哀悼の意を表するものである。(勝岡)

歴史認識問題研究

(年2回発行)

第11号 (令和4年秋冬号)

発行日：2022年9月16日

発行人：西岡 力

編集人：勝岡 寛次

編集部：歴史認識問題研究会

頒 価：1,000円

発行所：〒277-0065 柏市光ヶ丘2丁目1番1号

公益財団法人モラロジー道德教育財団

西岡 力 研究室

Tel：04-7173-3197 Fax：04-7173-3199

印刷所：株式会社 長正社